
大里郡寄居町

堀込遺跡

特別養護老人ホーム「花ぞの」建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2006

社会福祉法人 大里ふくしむら

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 掘込遺跡速景



2 掘込遺跡全景

序

寄居町は、荒川が秩父山間から関東平野に流れ出す扇状地の要にあり、古くは秩父往還の街道筋にありました。現在も国道140号と254号、JR八高線・東武東上線・秩父鉄道線が乗り入れるなど交通の要衝となっています。また自然に恵まれ、県指定の名勝玉淀や、名水百選のひとつ「風布川・日本水」などがあり、豊かな水と緑に囲まれた町です。

寄居町は旧石器時代から江戸時代に至るまで、多くの埋蔵文化財の所在が知られている由緒ある歴史の町でもあります。なかでも国指定史跡の鉢形城跡は、戦国期の城郭として著名であります。また正龍寺境内には、鉢形城主北条氏邦夫妻や寄居町周辺を支配した在地領主の藤田康邦夫妻の墓があり、県指定の史跡となっています。

このたび社会福祉法人大里ふくしむらでは、ヤマザクラやカタクリの里として知られる寄居町用土に特別養護老人ホーム「花ぞの」を建設することとなりました。事業地は、縄文時代から奈良・平安時代にわたる堀込遺跡内にあり、これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を進めてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課（当時）と寄居町教育委員会の調整により、社会福祉法人大里ふくしむらの委託を受けて、当事業団が実施しました。

調査の結果、縄文時代中期から後期の堅穴住居跡や土坑、古墳時代から奈良時代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡などが発見されました。これらの遺構からは、縄文土器、土師器・須恵器などの土器類や石器が多数出土し、当地域の歴史を解明する上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護・普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました社会福祉法人大里ふくしむら、寄居町教育委員会並びに地元関係者各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成18年11月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 福田陽充

発刊に寄せて

社会福祉法人大里ふくしむらは、このたび寄居町の用土地区において、小規模生活単位型特別養護老人ホーム「花ぞの」をオープンすることとなりました。

特別養護老人ホーム「花ぞの」は、大里の豊かな自然をのぞむ小高い丘のうえにたち、四季を通じて安らぎを感じることでできる施設です。また、一人ひとりの個性を尊重するとともに、家庭的な雰囲気を保ち、それぞれの生活リズムに沿ったケアを提供することで、安全で安心のできる豊かな生活を送っていただける施設を目指しています。

寄居町は、豊かな水と緑に囲まれた町で、旧石器時代から江戸時代に至るまで、多くの埋蔵文化財が知られている由緒ある歴史の町でもあります。県指定の名勝玉淀や、国指定の史跡「鉢形城跡」などは広く知られております。

さてホーム建設予定地には、堀込遺跡があり、縄文時代や古墳時代をはじめとする先人の生活跡が多く残されていました。この遺跡をどうするか、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存することとなりました。

発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課と寄居町教育委員会との調整により、当社会福祉法人大里ふくしむらが、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託しました。

調査の結果、縄文時代中期から後期の竪穴住居跡、古墳時代の竪穴住居跡など多数が発見されました。これらの竪穴住居跡からは、多量の土器が出土し、当地域の歴史を解明する上で貴重な発見となりました。

現在平成19年2月1日の開設を目指して、施設を建設しておりますが、今後とも地元寄居町の皆様のご指導とご支援を給うことを期待申し上げます。

平成18年11月

社会福祉法人 大里ふくしむら

理 事 長 松 本 勇

例言

- 1 本書は、大里郡寄居町用土に所在する堀込遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
堀込遺跡 (HRGM)
埼玉県大里郡寄居町大字用土字堀込2441番地-1
平成17年10月20日付け 教生文第2-65号
- 3 発掘調査は、特別養護老人ホーム「花ぞの」建設事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育委員会および寄居町教育委員会が調整し、社会福祉法人大里ふくしむらの委託を受け、寄居町教育委員会の指導の下、財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 発掘調査事業は、I-3の組織により実施した。調査は、平成17年9月26日から平成18年1月13日まで実施し、中村會司が担当した。
- 5 整理・報告書作成事業の実作業は平成18年7月1日から平成18年11月30日まで実施し、磯崎一が担当した。
- 6 遺跡の空中写真は、中央航業株式会社に委託した。
- 7 発掘調査時の写真撮影は中村・大鹿響子が行い、遺物の写真撮影は渡辺清志、大屋道則が行った。
- 8 出土品の整理・図版作成は磯崎が行い、富田和夫、岩瀬謙、瀧瀬芳之、渡辺の協力、山北美穂の補助を受けた。
- 9 本書の執筆は、I-1は寄居町教育委員会文化財課が、IV-1・V-1は渡辺、IV-2は岩瀬・山北が、他は磯崎が行った。
- 10 本書に掲載した資料は、平成19年4月以降寄居町教育委員会が管理・保管する。

凡例

- 1 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による平面直角座標第IX系（原点：北緯36°00'00"、東経139°50'00"）に基づく座標値を示し、各挿図内における方位はすべて座標北を示している。
- 2 遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設置し、10m×10mを基本グリッドとしている。
- 3 グリッドの名称は、北西杭を基準とし、東西方向は西から東へA、B、C…、南北方向は北から南へ1、2、3…とした。（例 C-3グリッド）
- 4 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

SJ 住居跡	SB 掘立柱建物跡
SA 柵列	SK 土坑
SD 溝跡	SR 道路跡
P ピット	

- 5 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。

遺構図





住居跡・掘立柱建物跡・柵列	1/60
土坑	1/15 1/30 1/60
溝跡	1/60
道路跡	1/200

遺物実測図

土器	1/4
縄文土器拓影図	1/2 1/3
土製品	1/3
石器	1/3 2/3
石製品	1/2 1/3 1/4
鉄製品	1:2
古銭	1:1

その他のものは個別にスケール・縮尺率を表記

- した。
- 6 遺物のうち、須恵器は断面を黒塗りにした。
 - 7 遺構断面図等に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
 - 8 挿図中の網掛け部分の表示は以下のことを示す。

	攪乱
	焼土
	炭化材
	硬化面

- 9 遺物観察表については次のとおりである。

- ・口径・器高・底径はcm、重さはgを単位とする。
- ・()内の数値は復元推定値を示す。
- ・胎土は肉眼で観察できるものを示した。
 - A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石
 - E：石英 F：軽石 G：砂粒子 H：赤色粒子 I：白色粒子 J：白色針状物質
 - K：黒色粒子 L：その他
- ・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。
- ・残存率は、破片の場合、図示した器形の部分に対する割合を示した。

- 10 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図、寄居町都市計画図1/2,500を使用した。
- 11 土層および土器類の色調の表記は『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に従った。

目次

口絵

序

発刊に寄せて

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	2. 古墳時代以降の遺構と遺物	73
1. 発掘調査に至る経過	1	(1) 住居跡	73
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(2) 掘立柱建物跡	111
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	2	(3) 柵列	115
II 遺跡の立地と環境	3	(4) 土坑	116
1. 地理的環境	3	(5) 溝跡	123
2. 歴史的環境	5	(6) 道路跡	125
III 遺跡の概要	8	(7) ビット	125
IV 遺構と遺物	12	(8) 製鉄関連遺物	127
1. 旧石器・縄文時代の遺構と遺物	12	(9) グリッド出土遺物	127
(1) 住居跡	12	V 調査のまとめ	135
(2) 土坑	45	1. 縄文時代	135
(3) グリッド出土遺物	58	2. 古墳時代以降	136

写真図版

挿 図 目 次

第 1 図	埼玉県の地形	3	第 36 図	第18号住居跡遺物出土状況	40
第 2 図	周辺の遺跡	4	第 37 図	第18号住居跡出土遺物 (1)	41
第 3 図	遺跡位置図	6	第 38 図	第18号住居跡出土遺物 (2)	41
第 4 図	遺跡周辺の地形図	9	第 39 図	第19号住居跡	42
第 5 図	調査区全体図	10	第 40 図	第19号住居跡遺物出土状況 (1)	43
第 6 図	第 6 号住居跡炉跡	12	第 41 図	第19号住居跡遺物出土状況 (2)	44
第 7 図	第 6 号住居跡	13	第 42 図	第19号住居跡出土遺物	44
第 8 図	第 6 号住居跡出土遺物 (1)	14	第 43 図	縄文時代の土坑	46
第 9 図	第 6 号住居跡出土遺物 (2)	14	第 44 図	第72・121号土坑遺物出土状況	47
第10 図	第 9 号住居跡	15	第 45 図	第88号土坑遺物出土状況	48
第11 図	第 9 号住居跡炉跡	16	第 46 図	土坑出土遺物 (1)	48
第12 図	第 9 号住居跡遺物出土状況 (1)	17	第 47 図	土坑出土遺物 (2)	49
第13 図	第 9 号住居跡遺物出土状況 (2)	18	第 48 図	第111号土坑遺物出土状況 (1)	50
第14 図	第 9 号住居跡炉跡遺物出土状況	19	第 49 図	第111号土坑遺物出土状況 (2)	51
第15 図	第 9 号住居跡出土遺物 (1)	20	第50 図	第111号土坑出土遺物 (1)	52
第16 図	第 9 号住居跡出土遺物 (2)	21	第51 図	第111号土坑出土遺物 (2)	53
第17 図	第 9 号住居跡出土遺物 (3)	22	第52 図	第111号土坑出土遺物 (3)	54
第18 図	第 9 号住居跡出土遺物 (4)	23	第53 図	第111号土坑出土遺物 (4)	55
第19 図	第 9 号住居跡出土遺物 (5)	24	第54 図	第111号土坑出土遺物 (5)	56
第20 図	第 9 号住居跡出土遺物 (6)	25	第55 図	第111号土坑出土遺物 (6)	57
第21 図	第14号住居跡	26	第56 図	グリッド出土遺物 (1)	59
第22 図	第14号住居跡炉跡遺物出土状況	27	第57 図	グリッド出土遺物 (2)	60
第23 図	第14号住居跡出土遺物 (1)	28	第58 図	グリッド出土遺物 (3)	61
第24 図	第14号住居跡出土遺物 (2)	29	第59 図	グリッド出土遺物 (4)	63
第25 図	第17号住居跡 (1)	30	第60 図	グリッド出土遺物 (5)	64
第26 図	第17号住居跡 (2)	31	第61 図	グリッド出土遺物 (6)	66
第27 図	第17号住居跡遺物出土状況 (1)	32	第62 図	グリッド出土遺物 (7)	67
第28 図	第17号住居跡遺物出土状況 (2)	34	第63 図	グリッド出土遺物 (8)	69
第29 図	第17号住居跡遺物出土状況 (3)	35	第64 図	グリッド出土遺物 (9)	70
第30 図	第17号住居跡出土遺物 (1)	35	第65 図	グリッド出土遺物 (10)	71
第31 図	第17号住居跡出土遺物 (2)	35	第66 図	第 1 号住居跡	73
第32 図	第17号住居跡出土遺物 (3)	37	第67 図	第 1 号住居跡出土遺物	73
第33 図	第17号住居跡出土遺物 (4)	38	第68 図	第 2 号住居跡	74
第34 図	第18号住居跡 (1)	39	第69 図	第 2 号住居跡出土遺物	75
第35 図	第18号住居跡 (2)	40	第70 図	第 3 号住居跡出土遺物	75

第71図	第3号住居跡	75	第97図	第13号住居跡出土遺物(4)	103
第72図	第4号住居跡出土遺物	76	第98図	第13号住居跡出土遺物(5)	104
第73図	第4号住居跡	76	第99図	第15号住居跡	106
第74図	第5号住居跡	78	第100図	第15号住居跡出土遺物	106
第75図	第5号住居跡出土遺物	79	第101図	第16号住居跡	107
第76図	第7号住居跡	80	第102図	第16号住居跡遺物出土状況	108
第77図	第7号住居跡遺物出土状況	81	第103図	第16号住居跡出土遺物(1)	109
第78図	第7号住居跡出土遺物(1)	82	第104図	第16号住居跡出土遺物(2)	110
第79図	第7号住居跡出土遺物(2)	83	第105図	第20号住居跡	111
第80図	第8号住居跡	84	第106図	第20号住居跡出土遺物	111
第81図	第8号住居跡出土遺物	85	第107図	第1号掘立柱建物跡(1)	112
第82図	第10号住居跡	86	第108図	第1号掘立柱建物跡(2)	113
第83図	第10号住居跡出土遺物	87	第109図	第2号掘立柱建物跡	114
第84図	第11号住居跡	89	第110図	掘立柱建物跡出土遺物	115
第85図	第11号住居跡出土遺物	90	第111図	第1号柵列	115
第86図	第12号住居跡(1)	91	第112図	土坑出土遺物	116
第87図	第12号住居跡(2)	92	第113図	土坑(1)	117
第88図	第12号住居跡遺物出土状況	93	第114図	土坑(2)	118
第89図	第12号住居跡出土遺物(1)	94	第115図	土坑(3)	119
第90図	第12号住居跡出土遺物(2)	95	第116図	土坑(4)	120
第91図	第13号住居跡(1)	97	第117図	溝跡出土遺物	123
第92図	第13号住居跡(2)	98	第118図	溝跡	124
第93図	第13号住居跡遺物出土状況	99	第119図	道路跡	125
第94図	第13号住居跡出土遺物(1)	100	第120図	グリッドピット	128
第95図	第13号住居跡出土遺物(2)	101	第121図	ピット・グリッド・表採出土遺物	133
第96図	第13号住居跡出土遺物(3)	102	第122図	製鉄関連遺物出土遺構	134

表 目 次

第1表	第6号住居跡柱穴計測表	12	第9表	第111号土坑出土遺物観察表	57
第2表	第6号住居跡出土遺物観察表	14	第10表	グリッド出土遺物観察表	72
第3表	第9号住居跡柱穴計測表	16	第11表	第1号住居跡出土遺物観察表	74
第4表	第9号住居跡出土遺物観察表	25	第12表	第2号住居跡出土遺物観察表	75
第5表	第14号住居跡柱穴計測表	27	第13表	第3号住居跡出土遺物観察表	76
第6表	第17号住居跡柱穴計測表	31	第14表	第4号住居跡出土遺物観察表	77
第7表	第17号住居跡出土遺物観察表	38	第15表	第5号住居跡出土遺物観察表	77
第8表	第18号住居跡出土遺物観察表	38	第16表	第7号住居跡出土遺物観察表(1)	81

第17表	第7号住居跡出土遺物觀察表 (2) ……82	第34表	第16号住居跡出土遺物觀察表 (3) ……110
第18表	第7号住居跡出土遺物觀察表 (3) ……84	第35表	第20号住居跡出土遺物觀察表 ……110
第19表	第8号住居跡出土遺物觀察表 ……85	第36表	第1・2号掘立柱建物跡出土遺物觀察表 ……………115
第20表	第10号住居跡出土遺物觀察表 ……88	第37表	土坑出土遺物觀察表 ……120
第21表	第11号住居跡出土遺物觀察表 ……89	第38表	土坑一覽表 (1) ……121
第22表	第12号住居跡出土遺物觀察表 (1) ……92	第39表	土坑一覽表 (2) ……122
第23表	第12号住居跡出土遺物觀察表 (2) ……94	第40表	土坑一覽表 (3) ……123
第24表	第12号住居跡出土遺物觀察表 (3) ……95	第41表	溝跡出土遺物觀察表 ……123
第25表	第12号住居跡出土遺物觀察表 (4) ……96	第42表	製鉄関連遺物一覽表 ……127
第26表	第13号住居跡出土遺物觀察表 (1) ……98	第43表	ビット一覽表 (1) ……130
第27表	第13号住居跡出土遺物觀察表 (2) ……102	第44表	ビット一覽表 (2) ……131
第28表	第13号住居跡出土遺物觀察表 (3) ……103	第45表	ビット一覽表 (3) ……132
第29表	第13号住居跡出土遺物觀察表 (4) ……104	第46表	ビット一覽表 (4) ……133
第30表	第13号住居跡出土遺物觀察表 (5) ……105	第47表	ビット・グリッド・表採出土遺物觀察表 ……………134
第31表	第15号住居跡出土遺物觀察表 ……105	第48表	住居跡一覽表 ……136
第32表	第16号住居跡出土遺物觀察表 (1) ……106		
第33表	第16号住居跡出土遺物觀察表 (2) ……108		

図版目次

口絵	1 堀込遺跡遺景	図版7	1 第19号住居跡
	2 堀込遺跡全景	2	第19号住居跡遺物出土状況
図版1	1 堀込遺跡全景	図版8	1 第72号土坑遺物出土状況
図版2	1 第6号住居跡	2	第88号土坑遺物出土状況
	2 第6号住居跡炉跡 (1)	3	第111号土坑配石遺構
	3 第6号住居跡炉跡 (2)	4	第111号土坑遺物出土状況 (1)
図版3	1 第9号住居跡	5	第111号土坑遺物出土状況 (2)
	2 第9号住居跡遺物出土状況	6	第111号土坑遺物出土状況 (3)
	3 第9号住居跡炉跡	図版9	1 第111号土坑遺物出土状況 (4)
図版4	1 第14号住居跡	2	第111号土坑
	2 第14号住居跡炉跡	図版10	1 第116号土坑
図版5	1 第17号住居跡	2	第121号土坑
	2 第17号住居跡遺物出土状況	3	第121号土坑遺物出土状況
	3 第17号住居跡炉跡		第6号住居跡出土遺物
図版6	1 第18号住居跡		第9号住居跡出土遺物
	2 第18号住居跡遺物出土状況	図版11	第9号住居跡出土遺物
	3 第18号住居跡炉跡		第14号住居跡出土遺物

- 図版12 第14号住居跡出土遺物
第17号住居跡出土遺物
- 図版13 第17号住居跡出土遺物
第18号住居跡出土遺物
第72号土坑出土遺物
- 図版14 第88号土坑出土遺物
第119号土坑出土遺物
第121号土坑出土遺物
第111号土坑出土遺物
- 図版15 第111号土坑出土遺物
- 図版16 第111号土坑出土遺物
- 図版17 第6号住居跡出土遺物
第9号住居跡出土遺物
- 図版18 第9号住居跡出土遺物
第14号住居跡出土遺物
第17号住居跡出土遺物
- 図版19 第17号住居跡出土遺物
- 図版20 第17号住居跡出土遺物
- 図版21 第17号住居跡出土遺物
- 図版22 第18号住居跡出土遺物
- 図版23 第19号住居跡出土遺物
- 図版24 土坑出土遺物
- 図版25 第111号土坑出土遺物
- 図版26 第111号土坑出土遺物
- 図版27 グリッド出土遺物
- 図版28 グリッド出土遺物
- 図版29 グリッド出土遺物
- 図版30 グリッド出土遺物
- 図版31 グリッド出土遺物
- 図版32 グリッド出土遺物
- 図版33 グリッド出土遺物
- 図版34 グリッド出土遺物
- 図版35 グリッド出土遺物
- 図版36 グリッド出土遺物
- 図版37 1 堀込遺跡 遺構確認状況
2 堀込遺跡 調査区全景
- 図版38 1 第1号住居跡
2 第1号住居跡カマド
- 図版39 1 第2号住居跡
2 第2号住居跡カマド
- 図版40 1 第3号住居跡
2 第4・5・10号住居跡
- 図版41 1 第4号住居跡
2 第5号住居跡
- 図版42 1 第5号住居跡カマド
2 第7号住居跡(1)
- 図版43 1 第7号住居跡(2)
2 第7号住居跡カマド
- 図版44 1 第8号住居跡
2 第8号住居跡カマド
- 図版45 1 第10号住居跡
2 第10号住居跡遺物出土状況
- 図版46 1 第11号住居跡
2 第11号住居跡カマド
- 図版47 1 第12号住居跡
2 第12号住居跡遺物出土状況
- 図版48 1 第12号住居跡カマド
2 第13号住居跡
- 図版49 1 第15号住居跡
2 第16号住居跡
- 図版50 1 第16号住居跡遺物出土状況
2 第16号住居跡カマド
- 図版51 1 第20号住居跡
2 第1号掘立柱建物跡
- 図版52 1 第2号掘立柱建物跡
2 第1号柵列
- 図版53 1 第1号道路跡(1)
2 第1号道路跡(2)
- 図版54 第10号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
第5号住居跡出土遺物
第7号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
第16号住居跡出土遺物
- 図版55

図版56 第16号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
金属製品

図版57 第3号住居跡出土遺物
第5号住居跡出土遺物
第7号住居跡出土遺物
第10号住居跡出土遺物

図版58 第10号住居跡出土遺物

第11号住居跡出土遺物
第12号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
第16号住居跡出土遺物
グリッド出土遺物

図版59

図版60 須恵器

図版61 土錘
石製品

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

社会福祉法人大里ふくしむら(以下 事業主体者)は、寄居町大字用土字堀込2440番地5、2441番地1、2441番地2、及び2441番地3の特別養護老人ホームの建設予定地における、文化財の所在及びその取扱いについて、平成17年5月2日付けで寄居町教育委員会教育長宛(以下 町教育長)に照会された。

寄居町教育委員会(以下 町教委)では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地(県遺跡№62-136 堀込遺跡)内に位置することから、平成17年6月14日から同月27日まで事前の確認調査を実施したところ、計画地において縄文時代から古代までの複数の堅穴式住居跡、土坑、道路状遺構等が検出された。町教委では計画通りに工事を施工した場合には遺構の損壊が明らかであると判断し、遺構が検出された範囲は現状保存することが望ましいがやむを得ず現状を変更する場合には事前に記録保存のための発掘調査が必要であると同年8月5日付けで回答した。その後、事業主体者と現状保存についての協議を重ねたが、計画の変更及び中止は不可能であるとの結論に至り、発掘調査を行うこととなった。

ただし、当該事業の完了予定は平成18年12月末日であり、工事計画上、平成17年12月までに調査を終了する必要があった。しかし、町教委においては即応することが困難な状況であったため、平成17年8月17日付け寄文発第234号で、埼玉県教育委員会教育長(以下 県教育長)宛てに埋蔵文化財発掘調査への

支援を依頼して対応策を協議した。これに対して埼玉県教育委員会生涯学習文化財課(以下 県教委)からは、当件の調査主体を埼玉県埋蔵文化財調査事業団(以下 県事業団)とする支援案が示され、この案をもとに、町教委、県教委、県事業団、及び事業主体者の4者で協議を行った。その結果、①発掘調査は県事業団を調査主体として実施すること、②発掘調査期間は平成17年9月26日から同年12月28日までの予定とすることで協議が整い、平成17年9月20日には4者による協定が締結された。また同月20日には協定に基づき事業主体者と県事業団との間で発掘調査の委託契約が交わされ、調査実施の運びとなった。

なお、文化財保護法(以下 法)第93条第1項の規定により事業主体者から平成17年9月9日付けで埋蔵文化財発掘の届出があり、町教委は同日付け寄文取第245号で県教委へ進達した。これに対して県教育長から同月26日付け教生文第3-475号により、事前の発掘調査につき指示通知がなされた。また、法第92条第1項の規定により県事業団理事長から県教育長宛に平成17年9月16日付け財理文第259号で埋蔵文化財発掘調査の届出があり、町教委は同月20日付け寄文取第250号で県教委へ進達した。県教育長からは同年10月20日付け教生文第2-65号で発掘調査の指示がなされた。

(寄居町教育委員会文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

堀込遺跡の発掘調査は、平成17年9月26日から平成18年1月13日まで実施した。調査面積は2,400㎡である。

9月26日より重機による表土除去作業を開始し、併行して調査事務所等の設営を行った。10月3日から補助員による遺構確認作業に着手し、順次遺構の精査を実施した。遺構確認と精査の結果、縄文時代中期の住居跡6軒、古墳時代後期の住居跡14軒・掘立柱建物跡2棟などが検出された。

遺構精査の後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影を行い、12月7日に空中写真撮影を実施した。

遺構の調査終了後、事務所撤去・事務手続きを行い調査は終了した。

なお、11月26日に遺跡見学会を実施し、202名の見学者があった。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書の作成事業は、平成18年7月1日から平成18年11月30日まで実施した。

7月当初から、出土遺物の水洗・註記を行い、続いて遺物の接合・復元作業を行った。並行して全体図・遺構図面は、図面修正を経て第2原図を作成し、スキャナーで取り込んだものをコンピューターでデジタルトレースを行った。遺物は復元が終了したのから実測作業に入り、8月から順次トレース・探拓を開始した。

10月に遺物の写真撮影、図面・写真の割付、原稿執筆を進め報告書の編集を開始した。11月に印刷会社を決定し入稿、校正を経て、平成18年11月に報告書を刊行した。

入稿後に本報告書で扱った図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

平成17年度（発掘調査）

理事長	福田 陽 充
常務理事兼管理部長	保 永 清 光
管理部	
管理部副部長	村 田 健 二
主 席	高 橋 義 和
主 席	宮 井 英 一

調査部	
調査部長	今 泉 泰 之
調査部副部長	坂 野 和 信
主席調査員（調査第二担当）	劍 持 和 夫
統括調査員	中 村 倉 司

平成18年度（整理・報告書刊行）

理事長	福田 陽 充
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一
総務部	
総務部副部長	昼 間 孝 志
総務課長	高 橋 義 和

調査部	
調査部長	今 泉 泰 之
調査部副部長兼資料活用部副部長	
	小 野 美 代 子
主幹兼整理第一課長	磯 崎 一

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

堀込遺跡は、埼玉県大里郡寄居町大字用土堀込2441番地1他に所在し、JR八高線用土駅の北約300mに位置する。用土地区は寄居町を南北に二分する荒川左岸にあたり、町の北部に位置している。美里町や旧岡部町、花園町（現深谷市）と程なく境を接している。

本遺跡は、用土地区のほぼ中央に位置し、陣見山から東に延びる松久丘陵東端の南斜面に立地している。用土地区は、この松久丘陵東端にあたる丘陵部と櫛挽台地からなり、丘陵と台地は、東・西藤治川によって分けられている。

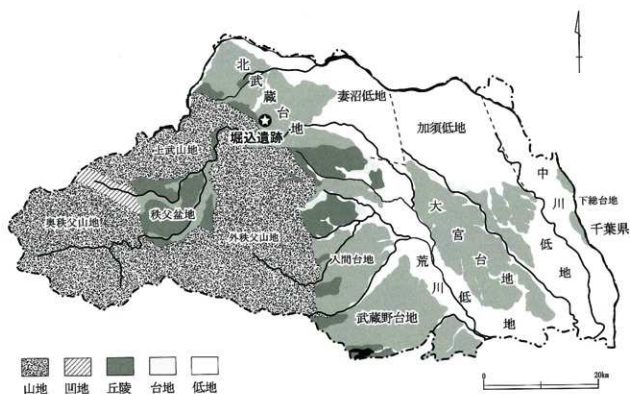
松久丘陵は、上武山地から北東方向に延びる半島

状の丘陵で、標高100m前後である。

櫛挽台地は、荒川左岸に形成された扇状地で、深谷市まで、大きく広がっている。

遺跡周辺には、残丘状の台地が残り、北方には、寄居町教育委員会や当事業団が調査を行った中山遺跡や東京大学による学術調査が行われた用土・平遺跡などの遺跡がある。

遺跡を載せる丘陵下の低地には、西藤治川が北流し、東藤治川と合流しやがて小山川に流入する。流域は、旧岡部町本郷付近まで水田化されている。遺跡の南側及び北側は小規模な谷が入り、標高は約92mで、低地との比高差は約5mを測る。



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡

2 歴史的環境

堀込遺跡では、旧石器時代の遺物として黒曜石製ナイフ形石器が1点出土した。その他周辺の遺跡は、末野遺跡、金嶽遺跡(29)がある。末野遺跡出土の局部磨製石斧等は、埼玉県最古の石器群とされている(富田・西井1999)。近隣の美里町東山遺跡(39)では細石刃核、如来堂遺跡では細石刃核、尖頭器が(宮崎1980)、旧岡部町北坂遺跡(70)ではナイフ形石器(増田ほか1981)が出土している。

縄文時代草創期の遺跡は、寄居町ではまだ確認されていないが、美里町では如来堂B・C遺跡(41)、旧岡部町では北坂遺跡等が知られている。

早期の遺跡は、山井ノ岡(6)、沼下(2)、東山、如来堂C遺跡等がある。本遺跡では遺構に伴わないが、押型文系、捺糸文系、沈線文系、条痕文系土器等が出土した。

前期の遺跡は、黒浜式期以降大集落遺跡が確認され、荒川中流域の縄文時代集落跡が安定して形成される時期である(寄居町教育委員会1984、1986)。本遺跡でも諸磯b式期の土坑が1基検出された。周辺では、山井ノ岡、金嶽遺跡(小林2006)が調査されている。荒川左岸北塚塚、小前田1遺跡は、前期諸磯式期を中心とした大集落で、多数の住居跡、土坑が調査されている。樋ノ下遺跡では諸磯b式とc式各1軒(細田・岩田1994)、上南原遺跡では諸磯a、b式期の住居跡11軒と土坑28基が検出された(曾根原1982)。荒川右岸では南大塚遺跡が当該期の大集落

で、関山式〜黒浜式の堅穴住居跡約70軒が調査された。また甘粕原遺跡、ゴシン遺跡で数軒の住居跡(並木1978)、むじな塚遺跡でも11軒、上郷西遺跡、東国寺東遺跡でも堅穴住居跡が検出されている。美里町では羽黒山古墳群(54)で黒浜式期の住居跡、鍛冶屋峯遺跡(47)では諸磯b、c式期の住居跡が、北貝戸遺跡(64)で諸磯a式期の住居跡3軒等調査例は多い。旧岡部町の清水谷(69)、安光寺(68)、北坂遺跡でも諸磯式土器が出土している。

中期加曾利E式期の集落跡は、荒川右岸では南大塚、東国寺東、増善寺、平倉、水川台、薬師台、平林2、甘粕原、ゴシン、露梨子、伊勢原、宮の前、庚申塚遺跡等多数の遺跡がある。本遺跡では中期後葉の住居跡が2軒検出された。周辺の用土北沢遺跡(15)では住居跡と炉跡を検出した。用土高城遺跡(14)では遺構に伴わないが、加曾利EⅢ式を中心に出土している。用土榊林遺跡(11)では住居跡が1軒調査された。谷津遺跡でも中期の遺物が出土した。美里町でも東山、甘粕山、栗山、鍛冶屋峯遺跡が調査されている。

後期になると、大集落跡は形成されなくなる。本遺跡では称名寺式、堀之内式等が出土し、金嶽遺跡では堀之内式、加曾利B式が出土している。荒川左岸樋ノ下遺跡では柄鏡形9軒を含む13軒の敷石住居跡が調査された(細田・岩田1994)。箱石遺跡では後期初頭の敷石住居跡や土坑が検出されている(細田・

〔西原町〕 1. 堀込 2. 沼下 3. 猪久保 4. 用土・平 5. 中山 6. 山井ノ岡 7. 日影 8. 水郷平 9. 用土丸山 10. 平松 11. 榊林 12. 用土土 13. 用土前峯 14. 高城 15. 北沢 16. 平北 17. 平清水 18. 藪ヶ谷戸 19. 井ノ岡 20. 南藤田 21. 岡田 22. 出羽塚 23. 布切ヶ谷戸 24. 布切ヶ谷戸北 25. 用土田中 26. 鶴引 27. 三軒家 28. 用土大塚 29. 金嶽 30. 南飯塚 31. 桜沢上の原 32. 桜沢原跡 33. 堀の内 34. 吉野鹿寺 35. 馬駒ノ内鹿寺 36. 木の根沢古墳群 37. 谷津遺跡・壁ヶ谷戸古墳群 38. 桜沢古墳群 〔美里町〕 39. 東山 40. 如来堂 A・B 41. 如来堂C・D 42. 上野 43. 一本松古墳 44. 登保南古墳群 45. 登保北古墳群 46. 普門寺古墳群 47. 鍛冶屋峯 48. 川向 49. 森後 50. こぶヶ谷戸祭祀遺跡 51. 引地 52. 濁ノ沢 53. 峯 54. 羽黒山古墳群 55. 神明ヶ谷戸 56. 池下 57. 雷電神社裏古墳 58. 諏訪林古墳 59. 中里新田 60. 大仏南寺 61. 中里天神山古墳群 62. 大仏古墳群 63. 原 64. 北貝戸 65. 諏訪山古墳群 66. 諏訪山古墳 67. 長坂聖天塚古墳 〔旧岡部町〕 68. 安光寺 69. 清水谷 70. 北坂 71. 中平 72. 赤城南 73. 伊勢方 74. 長坂 75. 寺山原跡



第3図 遺跡位置図

若松2001)。右岸では、上郷西、鉢形東遺跡等で敷石住居跡が確認されている。美里町、旧岡部町でもこの時期の遺跡は僅少である。晩期の遺物は、金藏遺跡で安行Ⅲ a 式が出土したが、本遺跡では出土していない。美里町では東山、如来堂 A、B、C 遺跡で終末期の遺物が出土している。

弥生時代の遺跡は、県選定重要遺跡の用土・平遺跡がある。中期後半の竪穴住居跡10軒と倉庫状建物跡2棟とが調査され、中部高地や群馬県方面と関連する櫛歯文系土器群が出土した。美里町の縄文晩期から弥生前期に比定される如来堂 C 遺跡や、環濠が検出された神明ヶ谷遺跡(55)が比較的近い位置にあり、その他河輪神社境内遺跡、猪俣南古墳群でも中期の遺物が出土している。

後期は中山遺跡(5)で吉ヶ谷式期の住居跡3軒と土坑1基(小林1999、赤熊2005)が調査されたほか、日影遺跡(7)、井の岡(19)遺跡が知られている。荒川右岸では伊勢原遺跡で1軒(石塚1996)調査されている。近隣の美里町神明ヶ谷遺跡、羽黒山古墳群(54)でも吉ヶ谷式の住居跡が検出されている。

古墳時代前期の集落跡は、南藤田遺跡(20)で五領式～和泉式段階の住居跡8軒が調査され、S字状口縁台付甕が出土した(高木1978)。用土北沢遺跡では、方形周溝墓が1基検出された。美里町の北貝戸遺跡で、S字状口縁台付甕が出土し、如来堂 C 遺跡では住居跡5軒が調査された。荒川右岸伊勢原遺跡では、五領式期の竪穴住居跡16軒を検出した(石塚1996)。

古墳時代後期の遺跡は、本遺跡の周辺には北沢、高城、出羽塚(22)、用土前峯(13)遺跡等がある。美里町では、上野遺跡(A・B地点)、鍛冶屋峯、川向(48)、森後遺跡(49)、池下遺跡(56)、引地(51)、滝ノ沢(52)遺跡等多数の調査例があり、多くの住居跡が検出されている。

古墳は、北沢遺跡で15基、高城遺跡で14基調査され、多量の埴輪が出土した。周辺の古墳群は木の根沢古墳群(36)、壁ヶ谷古墳群(37)がある。美里町では猪俣南(44)、猪俣北(45)、普門寺古墳群(46)がある。

奈良・平安時代の遺跡は周辺では沼下、平原遺跡、中山遺跡、前峰、北沢遺跡等がある。中山遺跡は、数次にわたる調査で住居跡25軒が調査され、その他掘立柱建物跡、製鉄炉、炭焼窯、竪穴状遺構、排滓坑等も検出され、製鉄関連遺跡とされている。本遺跡でも製鉄関連遺物が出土した。周辺では中山遺跡以外で製鉄炉が検出された遺跡は、箱石遺跡、台耕地遺跡(酒井1984)がある。甘粕山遺跡、中山遺跡では木炭窯も調査されている。製鉄関連遺物が出土する遺跡は、本遺跡周辺部に比較的多く分布している。また荒川左岸の末野から桜沢地区にかけては、著名な末野窯跡群がある。本遺跡周辺では、第15、16支群が確認されており、8世紀代と10世紀代の操業が推定されている。桜沢窯跡(32)は当事業団で調査(昼間1994)され、10世紀前半の年代があたえられている。さらに用土地区周辺は古代寺院跡が集中する地域で、馬騎ノ内廃寺(35)、吉野廃寺(34)が知られている。美里町東山遺跡では住居跡4軒、掘立柱建物跡4棟の他瓦塔・瓦堂が出土した。東伴場地遺跡では基壇状遺構が調査されている。

中世の遺跡は、用土城が藤田康邦の城館と伝えられているが、北沢遺跡で方形に巡る薬研堀の一部が検出されている。また鉢形城跡は著名な戦国時代後半期の城跡で、寄居町教育委員会による史跡保存整備事業が進められている。花園城跡の調査も実施されており、城跡に直接関連するものではないが溝跡2条が検出された(富田ほか1999)。

III 遺跡の概要

掘込遺跡は、上武山地から北東方向に細長く延びる松久丘陵の東端に位置する。

丘陵下の低地には藤治川が北流する。遺跡の南側と東側は、水田が広がり、比高差は約5mである。西側は尾根が連なるが、北側は小さな谷が入るなど、遺跡は地形的に比較的まとまった範囲にある。また丘陵頂部から裾部にまで、遺跡が及んでいる。

今回の調査区は、遺跡範囲の南東部分にあたり、面積は2,400㎡である。標高は、調査区北西端が93.55mで最も高く、南東端部で90.36mを測る。

検出した遺構は、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡2棟、土坑42基、溝跡3条、柵列1条、道路跡1条、ピット307基である。

遺構の時期は、縄文時代前期、中期から後期初頭、古墳時代、近世ないし近代にわたり、本遺跡の生活痕跡は大略三時期と把握することができる。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡6軒、土坑6基である。土坑1基が、前期諸磯B式期に属する他は全て中期後葉から後期初頭に属している。全般に遺構の遺存状態は不良なものが目立つ。

竪穴住居跡と土坑の分布範囲は、分散的であるが、中期後葉の第17・18号住居跡は中央付近から高い位置にあり、中期末から後期初頭の遺構は、第6号住居跡が、北側調査区際に着ているが、他の住居跡、土坑は、斜面中位から斜面裾部分、特に西半部に分布している。

第17・18号住居跡は、ほぼ同規模の楕円形をなす住居跡で、ともに4本主柱穴を持つ。第18号住居跡は、建替えによる設計変更の可能性も考えられている。主軸方向はいずれもほぼ同方向で、中期末から後期初頭の住居跡よりも規模が大きい。

第9号住居跡は、柄鏡形住居跡で南に張出部を持つ。主体部の径は4m前後で、他の住居跡と比較してもほぼ同規模となっている。また西壁から南壁にかけて、壁柱穴に沿って遺物の分布がみられ、深鉢

の意図的な破砕配置が窺われた。

第11号土坑からは、多量の小型精製深鉢が出土したが、土器組成に偏りが見られた。

7世紀代を中心とする古墳時代の遺構は、竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡2棟、土坑1基、柵列1条である。

竪穴住居跡の主軸方向の差異、重複関係や出土遺物から見ると2～3段階の変遷が考えられる。

遺構の分布を見ると、主に北半部に集中する。

住居跡は、一辺8m前後の大型、4～5m前後の中型、3m前後の小型のものに分けられ、小型、中型住居跡が大部分である。主軸方向は、南北方向のものが主体をなすが、東西方向も1/3程度を占める。大型住居跡は2軒で、調査区中央部に位置している。いずれも建替えが想定されている。小、中型住居跡は、調査区北東部に多く、やや離れて南端部に2軒みとめられる。

掘立柱建物跡は、住居跡群の外側に配置される。G-3～4グリッドに位置するピット群は、或いは掘立柱建物跡になる可能性がある。

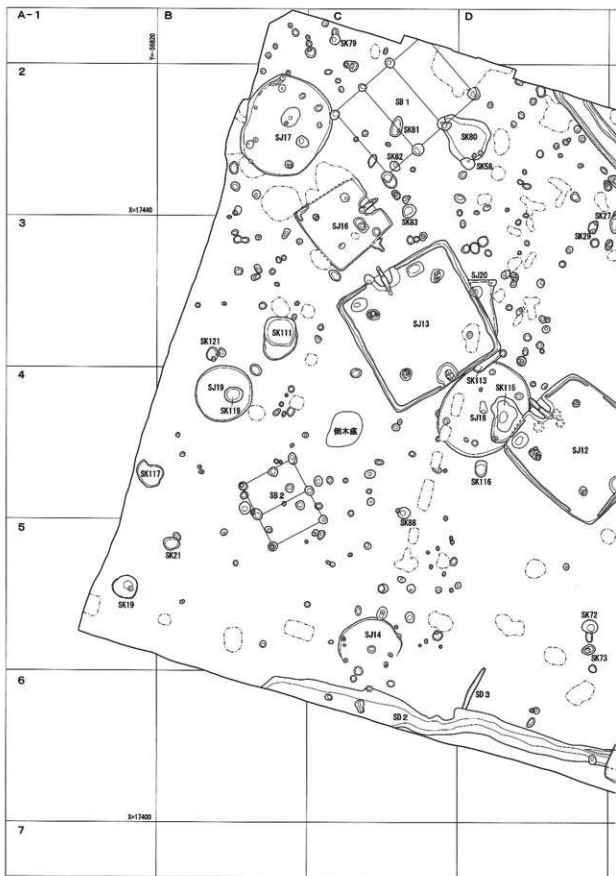
近世ないし近代以後の遺構は、道路跡1条、土坑35基、溝跡3条、ピット307基である。

道路跡とピット群の位置関係を見ると、道路跡に沿ってその両側に比較的まとまって分布している点が看取される。北側中央部から北西端部までの範囲は、特に集中しており、明確ではないが2～3棟の建物跡の存在が想定される。

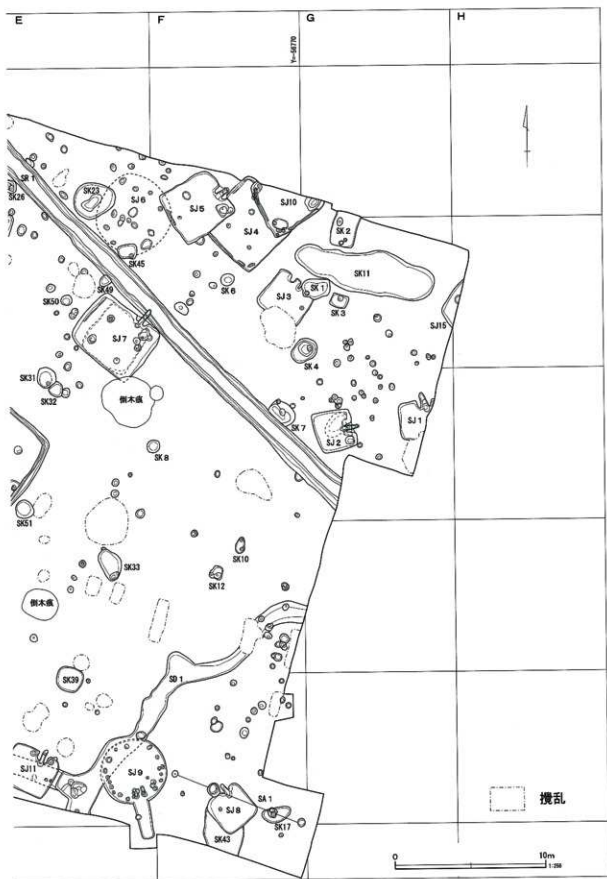
土坑は、調査区東半部に比較的集中している。溝跡は丘陵下、調査区に沿って鍵状に配置され、建物か畑等の区画溝と考えられる。埋土中から鉄滓等が出土したが、遺構に伴うものではない。第2号溝跡の北側西半部は、ピット群が認められるが、建物を想定できる程ではない。また部分的に直線的配列を示すものもあり、柵列等が考えられるが、溝跡や道路跡の走行方向とは一致していない。



第4図 遺跡周辺の地形図



第5図 調査区全体図



IV 遺構と遺物

1. 旧石器・縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第6号住居跡 (第6・7図)

E-2・3、F-2・3グリッドに所在する。第5号住居跡・第23・45号土坑等に切られているものと思われる。

壁は削平され検出できなかったが、直径4mほどの円形ないし楕円形の住居跡であったと考えられる。

まず遺構検出面において炉跡を発見し、その周辺から14本のピットを検出した。P2～P5を出入り口方向を示す対ピットと考えた場合、主軸方向はN-34°-E周辺を指す。

炉跡は埋燬炉であった。掘り方は不整形円形で、長さ0.69m、短径0.54m、深さ0.15mを測る。主軸はN-44°-Eを指す。焼土の堆積が比較的貧弱であったため、発見当初は単独の埋燬として調査が開始されている。

埋設されていた土器は第8図1の深鉢で、上下を欠いた胴部中段のみが掘り方のやや南西隅で正位に設置されていた。土器の内部からは第9図1の石皿片が出土した。

第6号住居跡出土遺物

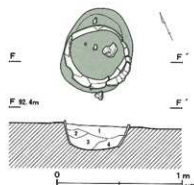
土器 (第8図)

1は炉体土器で、口縁部無文帯を持つ胴張りの大型深鉢とみられる。胴部中段のみ残存する。全面縄文のみ施文され、懸垂文等は見られない。

地文はRL単節の縄文で、やや右下がりに施文される。やや器壁が乾き気味の段階での施文で、厚痕はやや薄い。最大径54.3cm・現存高18.0cmを測る。

第1表 第6号住居跡柱穴計測表

名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
Pit 1	50.0	36.0	32.1	Pit 8	30.0	24.0	36.4
Pit 2	36.0	32.0	33.4	Pit 9	82.0	64.0	32.2
Pit 3	(54.0)	30.0	11.5	Pit 10	42.0	40.0	18.2
Pit 4	30.0	24.0	26.0	Pit 11	32.0	30.0	24.8
Pit 5	46.0	36.0	26.0	Pit 12	28.0	26.0	7.6
Pit 6	40.0	38.0	27.3	Pit 13	38.0	32.0	10.5
Pit 7	34.0	26.0	8.5	Pit 14	50.0	36.0	15.2



SJ6 炉跡
 1 黄褐色土 ソフトローム主体 焼土粒子微量
 2 黒褐色土 黒色土主体 焼土ブロック含む
 3 明黄褐色土 ローア粒子主体 黒色土含む 硝色を主する
 4 明黄褐色土 ローア粒子主体 黒色土含む

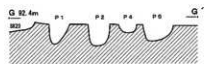
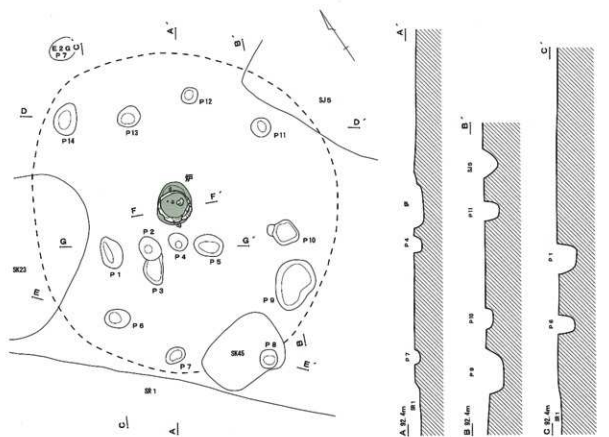


第6図 第6号住居跡炉跡

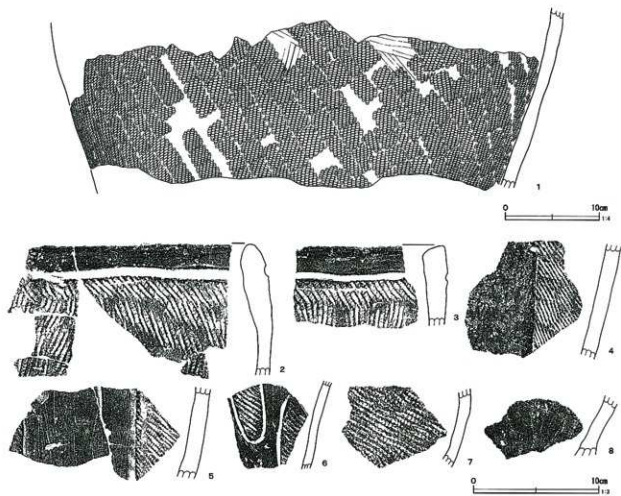
2は深鉢口縁部である。口唇肥厚して断面丸棒頭状を呈する。口縁下には1条の沈線が巡って口縁部無文帯を構成する。地文はRL単節の縄文で、区画直下では横位回転、それ以外では右下がりに施文される。

3もこれに類似の深鉢である。口唇断面は内削ぎ状で、口縁下に1条の沈線が巡って口縁部無文帯を構成する。地文はRL単節の縄文で、区画直下では横位回転、それ以外では右下がりに施文される。

4・5は微隆起線による幅広の磨消懸垂文がみられる深鉢胴部破片である。地文はLR単節の縄文で微隆起線の側縁にも乗り上げている。



第7图 第6号住居跡



第8図 第6号住居跡出土遺物(1)

6は磨消縄文がみられる小型精製深鉢である。楕円形の磨消モチーフが上下から交錯する。地文はLR単節の縄文で縦位回転で施文される。

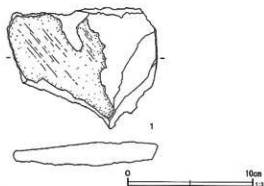
7は縄文のみ施文される胴部破片である。地文はLR単節の縄文で、縦位回転で施文される。

8は底部直上の破片とみられる。無文で、縦位の

研磨が施される。

石器(第9図)

1は炉内から出土した石皿片である。かろうじて磨り面だけは確認可能であるが、四辺を欠き、背面も剥落するなど、まったく原型をとどめていない。石材は緑泥片岩を使用する。



第9図 第6号住居跡出土遺物(2)

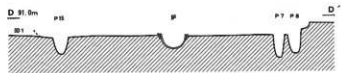
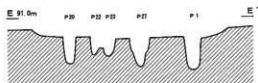
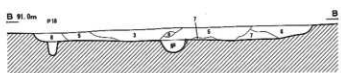
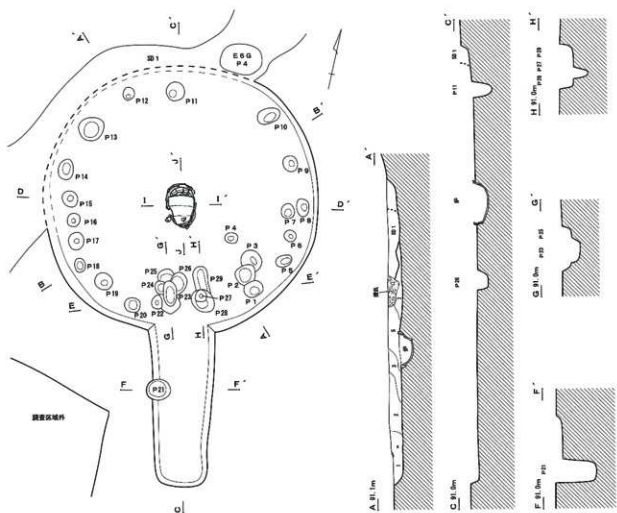
第9号住居跡(第10~14図)

E-6・7、F-6グリッドに所在する。北西壁の大部分を第1号溝跡に切られる。

南に張出部を持つ柄鏡形竅穴住居跡で、張出部を

第2表 第6号住居跡出土遺物観察表(第9図)

番号	器種	石材	長さ(cm)
1	石皿	緑泥片岩	12.1
幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
6.7	2.2	248.0	



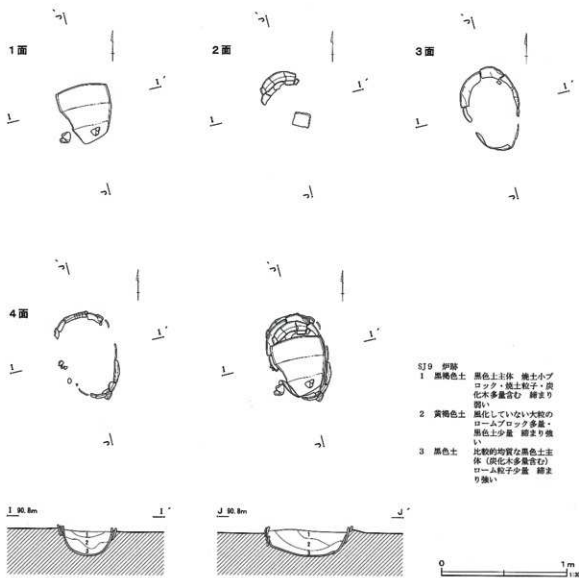
- SJ9
- | | |
|---------|----------------------------|
| 1 黄褐色土 | ロームブロック・ローム粒子主体 小礫と土器を多量含む |
| 2 黄褐色土 | ロームブロック・ローム粒子主体 |
| 3 黒褐色土 | 黒色上中にローム粒子・少量の焼土粒子含む |
| 4 赤褐色土 | 焼土ブロック・ローム粒子主体 |
| 5 暗黄褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量 |
| 6 暗黄褐色土 | ロームブロック・ローム粒子含む |
| 7 暗黒褐色土 | 黒色上中にローム粒子微量含む |
| 8 暗黄褐色土 | ローム粒子主体 黒色土微量 |



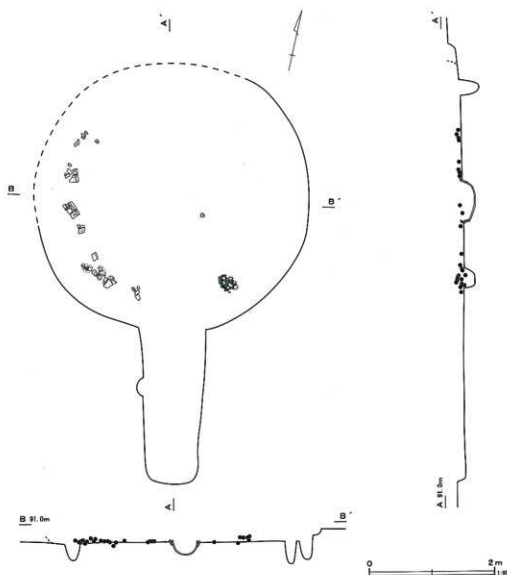
第10図 第9号住居跡

第3表 第9号住居跡柱穴計測表

名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
Pit 1	30.0	24.0	50.5	Pit16	22.0	20.0	19.7
Pit 2	(36.0)	32.0	38.7	Pit17	26.0	24.0	25.8
Pit 3	(36.0)	32.0	14.0	Pit18	22.0	16.0	24.9
Pit 4	22.0	16.0	10.4	Pit19	30.0	26.0	61.5
Pit 5	26.0	20.0	28.0	Pit20	26.0	24.0	42.0
Pit 6	18.0	18.0	31.0	Pit21	40.0	34.0	65.0
Pit 7	24.0	22.0	38.8	Pit22	22.0	18.0	27.9
Pit 8	28.0	20.0	37.7	Pit23	50.0	(34.0)	14.1
Pit 9	26.0	24.0	41.1	Pit24	(22.0)	20.0	18.0
Pit10	36.0	24.0	74.8	Pit25	(28.0)	26.0	14.3
Pit11	30.0	30.0	40.3	Pit26	(34.0)	26.0	16.6
Pit12	20.0	18.0	40.3	Pit27	20.0	16.0	21.3
Pit13	42.0	36.0	21.9	Pit28	40.0	32.0	24.4
Pit14	32.0	24.0	20.1	Pit29	(56.0)	24.0	22.1
Pit15	26.0	24.0	26.8				



第11図 第9号住居跡炉跡



第12図 第9号住居跡遺物出土状況(1)

含めた全長6.66m、主体部の最大径4.38m、深さ0.14mを測る。主軸はN-12°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、奥壁から炉跡周辺にかけて傾斜がみられた。床面上から28本のピットを検出した。大半が壁に沿って並ぶ壁柱穴を構成する。P22~28は出入口施設の対ピットを構成する。出入口部の埋塞は発見できなかった。

張出部の全長は2.40m、最大幅は1.08mを測る。西壁のほぼ中間部にピット1本を検出したほかは何等施設を伴っていない。先端部の埋塞を持たず、抜取り痕らしきものも検出されていない。主体部から張

出部先端にかけての床面はほぼ平坦に推移している。

主体部の中央やや前面に炉跡を検出した。倒卵型の土器片囲い炉で、全周を土器片で囲うほか、底面も深鉢の大型破片で覆っている。全体の長径69cm、短径57cm、深さ22cmを測る。主軸は住居跡本体とほぼ共通で、N-16°-Wを指す。なお、これは土器囲い部から採寸したものであり、掘り方は明確に検出し得なかった。

土器囲い部に使用されているのは第15図以下の3・5・7の土器である。部分ごとの個体の使い分

けを第14図に示した。雑多な破片で外周を二重〜三重に囲った後に、中央に3の個体の大破片がすっぽりと納められており、当初からの計画性を持って造られていることがわかる。

主体部西壁から南壁にかけて、壁柱穴に沿って遺物の分布がみられた。特筆すべきは西壁側に、第15図1の個体に属する破片だけが集中する部分がある点で、偶発的な投棄や流入ではなく、意図的な破碎配

置が行われたものと考えべきだろう。

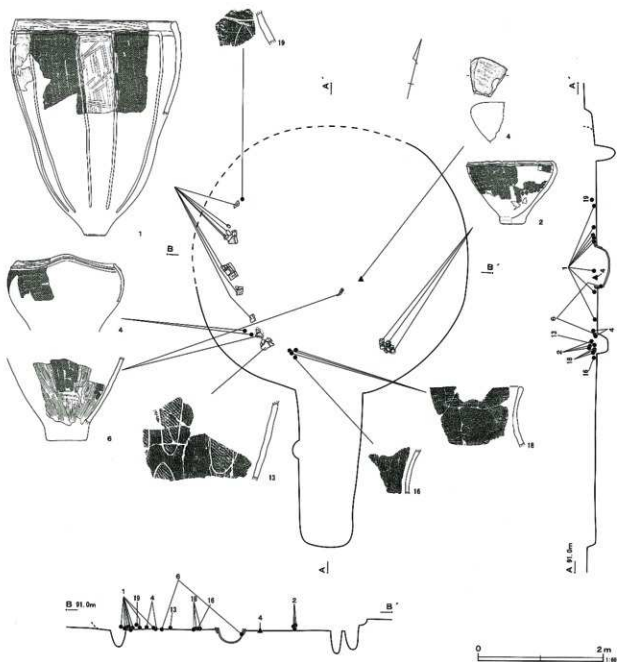
また、出入り口部左脇には第15図2の浅鉢が破碎状態で一括出土している。

第9号住居跡出土遺物

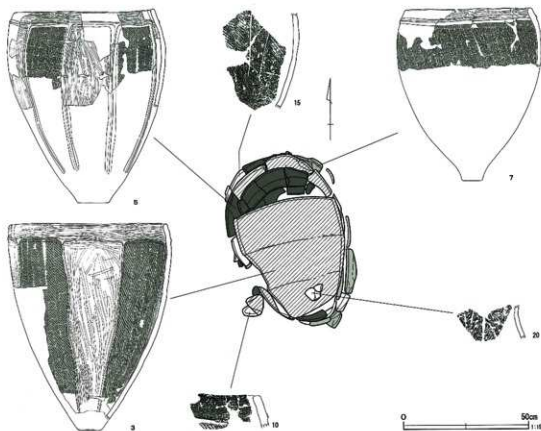
土器 (第15~19図)

1・3・5は幅広の懸垂文を施文する大型深鉢で、互いにきわめて似通った外観を持つ。

1は口縁部に無文帯を持ち、頸部に微隆起線を巡



第13図 第9号住居跡遺物出土状況 (2)



第14図 第9号住居跡炉跡遺物出土状況

らせる。この区画を基点として胴部に幅広の磨消懸垂文が垂下する。縄文施文部では微隆起線側縁にも縄文が乗り上げている。

地文はLR単節の縄文で、概ね縦位回転で施文されるが、頸部区画帯の直下では、微隆起線に沿って横位回転で施文されている。最大径45.8cm・現存高25.1cmを測る。焼成は良好だが、胎土に小礫が目立つ。

3もこれに類似の大型深鉢である。地文はやはりLR単節の縄文で、微隆起線側縁に乗り上げて施文される点も共通であるが、区画の方向に規制されず、すべて縦位回転で施文される点が1の個体と異なっている。最大径44.0cm・現存高52.1cmを測る。ややシルト質の胎土である。

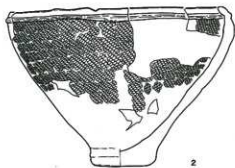
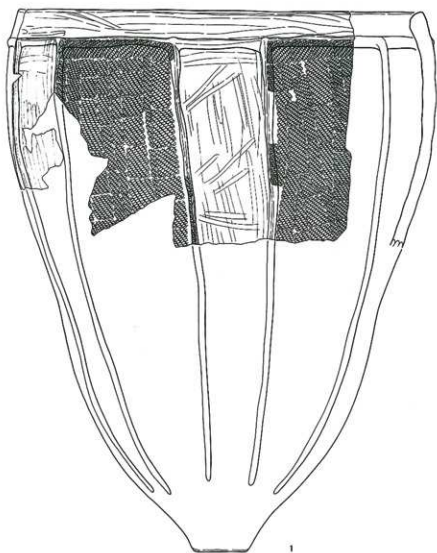
5も同種の深鉢である。口縁部無文帯と胴部文様帯を微隆起線で区画し、胴部に幅広の磨消懸垂文が垂下する点は共通しているが、胴部において微隆起

線の両側に幅広沈線のなぞりが加えられる点が1・3との顕著な相違点となっている。

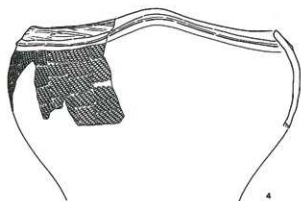
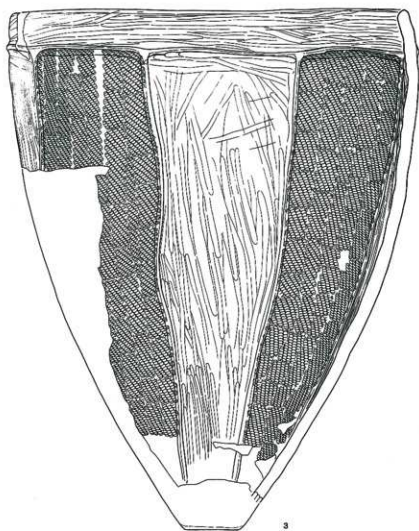
縄文はやはりLR単節の縄文であり、横位の区画に沿った部分では横位回転、それ以外では縦位回転で施文されている。最大径42.4cm・現存高26.0cmを測る。胎土はややシルト質である。

2は小型の鉢である。底部から胴上半部にかけては内湾しつつ直線的に開き、口縁部で強く内屈する。口縁直下に幅狭の無文帯が存在し、胴部との境は1条の扁平な隆帯で区画される。区画の直下から胴部中段にかけてはLR単節の縄文が縦位回転で施文される。最大径24.2cm・器高16.6cmを測る。

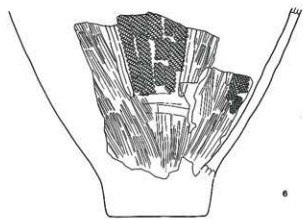
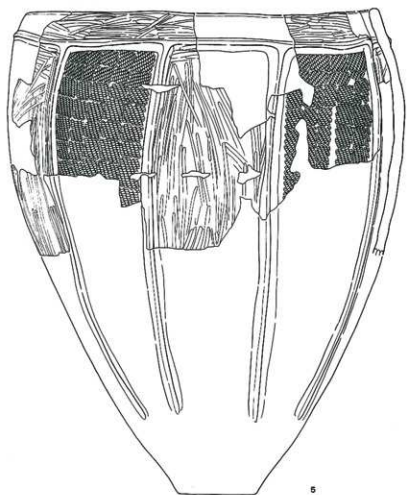
4は小型の深鉢口縁部である。緩やかな4単位の波状口縁をなすものとみられ、口縁下に微隆起線が巡って胴部との境を区画している。胴部にはLR単節の縄文が縦位回転で施文され、他に文様はみられない。区画の直下には幅広沈線のなぞりが加えられて



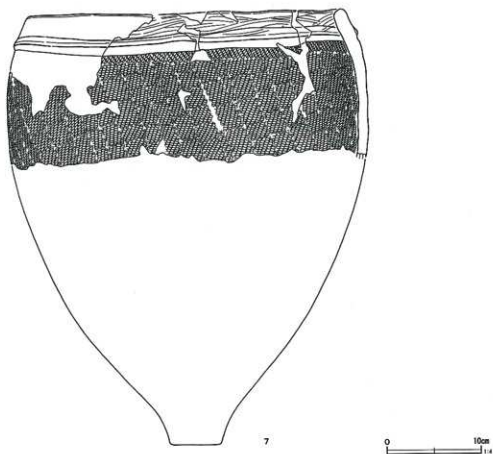
第15図 第9号住居跡出土遺物(1)



第16图 第9号住居跡出土遺物(2)



第17图 第9号住居跡出土遺物(3)



第18図 第9号住居跡出土遺物(4)

いる。最大径31.1cm・現存高11.3cmを測る。

6は深鉢胴下半部である。扁平な隆帯による磨消懸垂文が描かれ、地文はLR単節の縄文が縦位回転で施文される。無文部には縦位の研磨が顕著にみられる。最大径31.2cm・現存高18.0cmを測る。焼成は良好である。

7は胴張りの深鉢である。口縁下に無文帯を持ち、胴部との境を微隆起線で区画し、直下に幅広の沈線によるなぞりが加えられる。胴部にはRL単節の縄文が縦位回転で施文されるが、区画の直下のみ横位回転で施文される。最大径38.4cm・現存高16.3cmを測る。胎土に多量の砂を含む。

8は覆土に混入した前期の土器で、諸磯b式である。扁平な浮線文により器面が分割され、内部に弧線文が描かれる。地文はLR単節の縄文で、浮線にも施文される。

9以降は加曾利E系の土器群で、いずれも後期初頭のもつとみられる。9・10は胴張りの大型深鉢の口縁部である。口唇断面角頭棒状を呈し、口縁内湾して幅広の無文帯を持つ。胴部には縄文が施文され、両者の境は断面三角形の隆帯と幅広の沈線によって区画される。

地文はいずれもRL単節の縄文で、隆帯に沿って横位に施文される。復元資料中の1・3・5・7に類似の器形で、あるいはこれらと同一個体であるかもしれない。

11も無文の口縁部であるが、口唇断面は内閉ぎ状で、軽微に外反する。薄手の器壁であり、小型精製深鉢に付随するものであろう。

12~17は磨消文様のみられる胴部で、小型精製深鉢に属するものである。

12はキャリパー形の深鉢胴上半部とみられる。強

く内湾する器形で、磨消縄文による楕円形の区画が描かれ、内部にLR単節の縄文が充填される。

13は楕円区画が上下に対峙するものである。本来キャリパー形深鉢にみられる文様構成だが、本資料はゆるやかに内湾する寸胴の器形を示している。地文はLR単節縦位回転の縄文である。

20は胴部中段の破片で、V字および逆V字の区画が上下から交錯している。地文はRL単節の縄文である。

14・15は胴下半部で、逆U字ないし逆V字の区画が底部に向けて開放する部分である。地文は前者がRL単節、後者はLR単節の縄文で、縦位回転で施文される。

16は無文の深鉢胴下半部とみられ、縦位の研磨調整が観察される。17は磨消懸垂文の胴下半部で、地文

はRL単節縦位回転の縄文である。

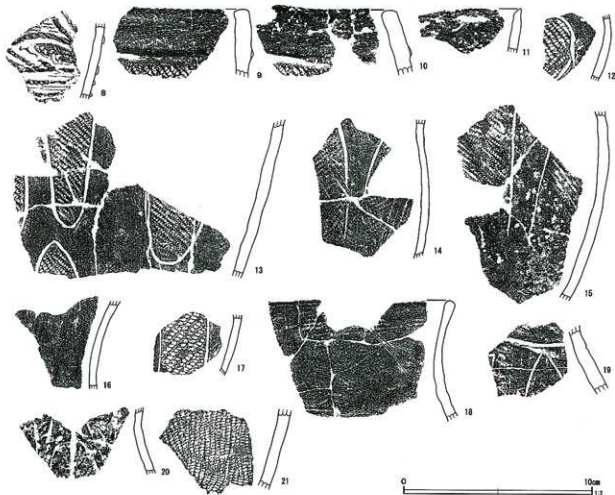
18は両耳壺である。軽微に外反しつつ直立する口縁部で、幅広の無文帯を構成する。全面に横位の撫で調整が観察される。

19も両耳壺とみられる。頸部と胴上半部を隔てる区画部分で、1条の沈線により区画される。胴部に小型精製深鉢の流れをくむ鋸歯文を持つが、縄文は施文されない。胴部と頸部の境に段や屈曲をもたない腰高かつ単調な器形で、明らかに後期的な特徴を示している。

21は縄文のみ施文される胴部である。地文はRL単節の縄文で、右下がりに施文されている。

石器 (第20図)

1はスクレイパーである。縦長剥片を三角形に整形し、底辺部分を刃部としたものだが、左三分の一程



第19図 第9号住居跡出土遺物 (5)

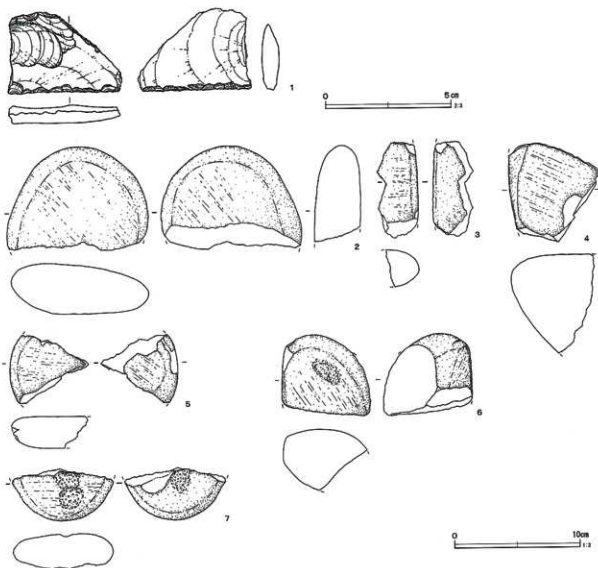
度を欠失している。石材は黒色頁岩を使用している。

2～5は磨石である。石材はいずれも閃緑岩が使われている。

2・5は楕円形で両面使用されている。3も両面使用で、直線的に整形された側縁が残る。4のみ片

面使用で、全体の規模を知ることはできないが厚味があり、台石的なものであった可能性がある。

6・7は磨石転用の凹石で、6は片面使用、7は両面使用する。石材は前者が砂岩、後者は閃緑岩を使用する。



第20図 第9号住居跡出土遺物(6)

第4表 第9号住居跡出土遺物観察表(第20図)

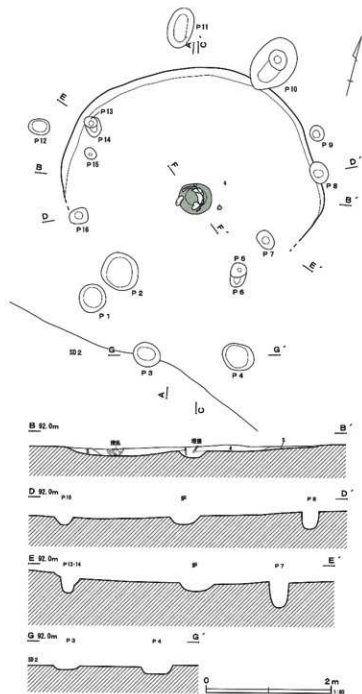
番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	スクレイパー	黒色頁岩	3.2	4.5	0.7	11.9	
2	磨石	閃緑岩	8.1	11.3	4.7	496.6	
3	磨石	閃緑岩	7.5	3.3	3.4	104.9	
4	磨石	閃緑岩	7.8	7.4	8.5	467.5	
5	磨石	閃緑岩	5.3	6.2	2.5	82.5	
6	凹石	砂岩	6.4	7.1	5.2	231.8	
7	凹石	閃緑岩	4.1	8.1	2.9	113.4	

第14号住居跡 (第21・22図)

C-5・6グリッドに所在する。正確な範囲は不明だが、第2号溝跡に切られている可能性がある。

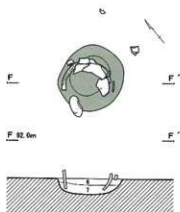
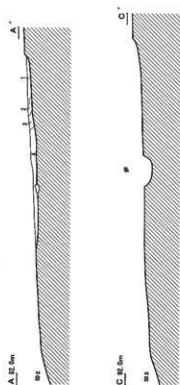
円形ないし楕円形の竪穴住居跡と考えられるが、

覆土が薄く、削平により南壁の大半を失っている。残存部分の長径4.20m、短径3.42m、深さ0.09mを測る。主軸はN-14°-Wを指すが、最大径は東西側に長くなっている。壁の立ち上がりは鈍角で、本来の



S114

- 1 ローム土
- 2 黒色土
- 3 砂子
- 4 暗黒色土 ローム砂子・焼土小ブロック混量
- 5 暗黄褐色土 ローム砂子主体 黒色土微量



S114 伊藤

- 6 黄褐色土 ローム砂子と黒色土砂子をほぼ同量含む 焼土砂子微量
- 7 暗褐色土 黒色土主体 ローム土少量 跡残り強い

第21図 第14号住居跡

第5表 第14号住居跡柱穴計測表

名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
Pit 1	46.0	44.0	12.2	Pit 9	26.0	22.0	21.2
Pit 2	62.0	60.0	27.3	Pit10	92.0	64.0	45.5
Pit 3	44.0	38.0	11.2	Pit11	64.0	40.0	20.5
Pit 4	52.0	42.0	15.5	Pit12	34.0	26.0	16.8
Pit 5	26.0	24.0	43.0	Pit13	22.0	18.0	27.6
Pit 6	(38.0)	26.0	12.7	Pit14	(34.0)	24.0	11.7
Pit 7	32.0	24.0	39.6	Pit15	20.0	16.0	16.3
Pit 8	36.0	26.0	29.0	Pit16	40.0	26.0	13.4

壁はより外周に存在した可能性もある。

床面はほぼ平坦である。壁の内側からは数本の小ピットが検出されるにとどまったが、壁外からも合計16本のピットが検出されており、壁柱穴に近い構成をとるものと考えられる。

床面ほぼ中央から炉跡を検出した。不整形形の埋薬炉で、掘り方の長径0.51m、短径0.48m、深さ0.14mを測る。主軸はN-79°-Eを指す。埋設土器は第23図1の深鉢で、やや西壁に寄って検出された。深鉢の口縁から胴上半部を正位に埋置しているが、全周の約半分を欠失しており、この部分を炉石とおぼしき礫1点で補っている。

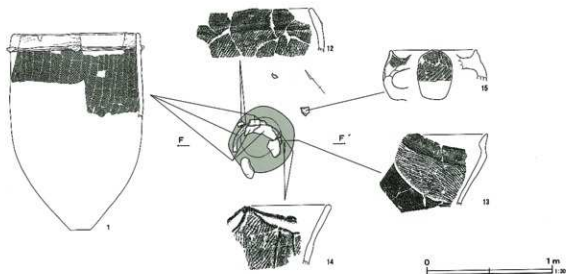
遺物はほとんどが炉跡およびその周辺から出土したものであるが、第23図2の鉢は遺構検出面で出土している。

第14号住居跡出土遺物

土器 (第23・24図)

1は炉体土器である。東北地方南部牛轡式の流れをくむ寸胴の大型深鉢である。胴部中段から口縁にかけて軽微に内傾しつつもほぼ垂直に立ち上がる。口縁下に幅広の無文帯を持ち、胴部との境を断面三角形の隆帯で区画する。この区画上には中期加曾利E式的な口縁部文様帯の痕跡である舌状の突起が4単位配されている。

胴部にはRL単節の縄文である。胴上半部では縦位回転で整然と施文されるが、胴部中段において斜め施文への遷移がみられ、この点でも東北地方南部との類似を示している。最大径36.7cm・現存高22.4cmを測る。多量の砂・小礫・シルトを含む粗悪な胎土であり、焼成はやや不良である。



第22図 第14号住居跡炉跡遺物出土状況

2は本遺跡では数少ない称名寺系の土器で、碗形の鉢である。胴張りで、底部から口縁にかけて単調に内湾する。口唇断面角頭棒状を呈し、口縁下に無文帯をもつ。胴上半部に帯縄文が巡り、胴部中段にかけてやや寸詰まりのJ字文が垂下する。地文はL無節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。底部付近には横位～斜位の研磨が観察される。胎土はやや砂質で、チャートや石英の亜角礫が目立つが、焼成は比較的悪くない。

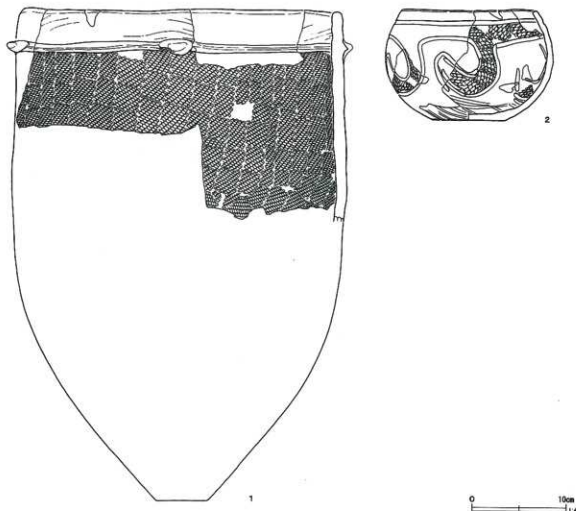
3・4は覆土に混入した早期の土器である。3は前葉の燃糸文系土器である。口唇は肥厚して強く外反する。頸部に絡条体の圧痕がみられ、これを基点として胴部に縦位の燃糸文が施文されている。4は中葉の沈線文土器である。細身の丸棒状工具による

単沈線で区画が構成され、内部に貝殻腹縁圧痕文を施文する。

5以下は加曾利E系の土器群であり、中期末葉から後期初頭ににかけてのものが混在する。

5～11は中期末葉の加曾利EⅢ式である。キャリパー系の大型深鉢で、いずれも口縁部文様帯の一部である。口唇肥厚して内湾し、なごりを伴った扁平な隆帯により渦巻文および区面文が描かれる。5・10・11は文様の中核をなす渦巻文で、形骸化し楕円文化している。地文はすべてRL単節横位回転の縄文である。9の口唇は断面角頭棒状を呈し、上面平坦となっている。浅鉢の口縁である可能性もある。

12～14は後期初頭に属するものである。12は胴張りの大型深鉢で、口縁部の無文帯と胴部の縄文施文



第23図 第14号住居跡出土遺物 (1)



第24図 第14号住居跡出土遺物(2)

部の間を扁平な隆帯で区画している。

13はいわゆる闊沢型である。4単位の大波状口縁をなす。口縁部無文帯を持ち、胴部との境に屈曲を持ったうえ、1条の微隆起線で区画する。口唇の内面には断面三角形の稜をなす。

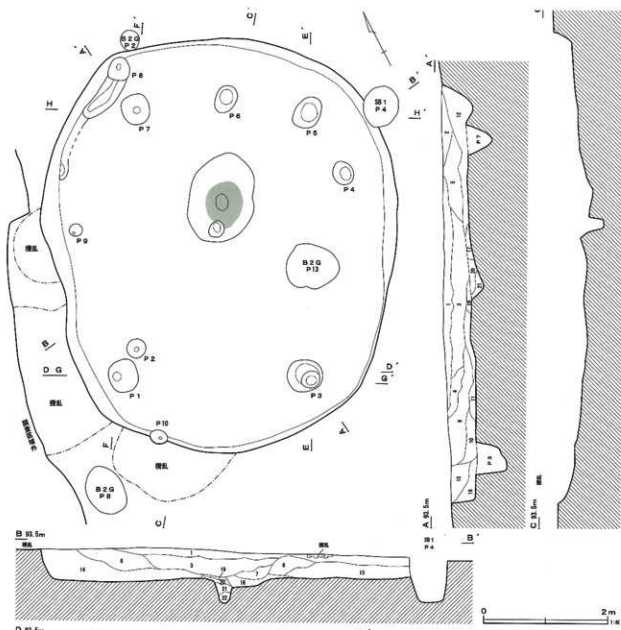
波状口縁の波頂部には胴部無文帯が貫入し、結果として波底部に半円形の区画が形成して、内部にLR単節の縄文を充填する。

14は山形波状口縁の深鉢である。微隆起線による磨消文様が描かれる。口縁直下に無文帯を持つが、波状口縁波頂部では縄文施文部が口端へと貫入する。胴上半部には微隆起線による波状の区画が描か

れるものとみられるが、逆V字状にせり上がった区画の末端が口縁部無文帯と癒着している。地文はRL単節縦位回転の縄文が施文される。

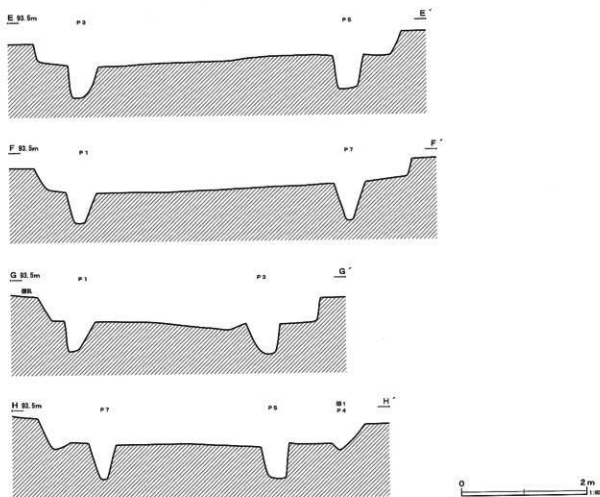
15は両耳壺の把手である。背面上端に舌状の突起を伴う橋梁状の把手で、背面文様を持たず、複節RLRの縄文が施文される。中期末～後期初頭いずれのものかは不明だが、背面文様を持たない点はやや新しい要素といえる。

16も同時期の胴部破片である。地文はRL単節の縄文であり、縦位施文を基調としつつも破片上端では横位施文へと変わっているのは文様帯下端の区画線に規制されているためであるとみられ、胴上半部に



- | | | |
|--|---|---|
| <p>SJ17</p> <p>1 暗茶褐色土
1層に比して黒土が少し多い</p> <p>2 暗茶褐色土
ローム粒子含む 炭土粒子少量 締まりあり</p> <p>3 黒褐色土
暗褐色土が3層より少なく締まり欠ける。砂心い</p> <p>4 黒褐色土
暗褐色土が3層より少ない。ロームブロック少量 3層より締まり欠ける。明るい</p> <p>5 黒褐色土
暗褐色土が3層より少ない。ロームブロック少量 3層より締まり欠ける。明るい</p> <p>6 黒褐色土
ローム粒子含む。炭化物粒子含む。ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子含む。炭土粒子多量 締まりあり</p> <p>7 黒褐色土</p> <p>8 黒褐色土</p> | <p>9 暗茶褐色土
ローム粒子主体 風化したロームブロック・暗灰色粘土ブロック含む。炭化物粒子少量</p> <p>10 暗茶褐色土
ローム粒子主体 ロームブロック含む。炭化物粒子少量</p> <p>11 暗茶褐色土
ローム粒子主体 粒子が細かくさらさらしている</p> <p>12 暗茶褐色土
ローム粒子主体 風化したロームブロック・暗灰色粘土ブロック含む。炭化物粒子少量</p> <p>13 暗茶褐色土
ローム粒子主体 風化したロームブロック・暗灰色粘土ブロック含む。炭化物粒子少量 やや締まりあり</p> <p>14 暗茶褐色土
ローム粒子主体 ロームブロック含む。炭化物粒子少量 暗灰色粘土ブロック含む やや締まりあり</p> | <p>15 黄褐色土
ローム解 締まりなし。さらさらしている</p> <p>16 黄褐色土
ローム解 締まりなし。さらさらしている。15層より細かい</p> <p>17 暗灰褐色土
ローム土主体 黒色土含む やや締まりあり</p> <p>18 暗黄褐色土
炭土粒子含む</p> <p>19 暗黄褐色土
17層よりもローム土が多く明るい。やや締まりあり</p> <p>20 暗黄褐色土
17層に比して黒土を多く含む。暗い</p> <p>21 黒褐色土
黒色土主体 ローム粒子含む 締まりなし。さらさらしている</p> <p>22 黒褐色土
21層に比してローム粒子が少なく暗い。締まりなし。さらさらしている</p> <p>SJ17 ビット</p> <p>23 暗黄褐色土
細かなローム主体 黒色土少量</p> <p>24 暗黄褐色土
23層より暗色を帯びる</p> <p>25 黒褐色土
23・24層に類似するがより多くの黒色土を含む。暗色を減する</p> <p>26 黄褐色土
ロームブロック主体 黒色土・粘土少量含む 締まり強い</p> |
|--|---|---|

第25図 第17号住居跡 (1)



第26図 第17号住居跡 (2)

区画文をもつ中期末葉の両耳壺である可能性が高い。

第17号住居跡 (第25～29図)

B-2、C-2グリッドに所在する。西壁を第1号掘立柱建物跡の柱穴に切られている。

楕円形の竪穴住居跡で、長径6.60m、短径5.70m、深さ0.45mを測る。主軸方向はN-28°-Eを指す。

床面は起伏にとみ、中央がやや下がっている。床面上から9基のピットが検出された。四隅に位置するP1・P3・P5・P7が主柱穴に相当、P4・

P6がこれに準ずるものとみられる。北西壁の一部で壁溝を検出した。

炉跡は主軸上やや奥壁寄りに位置している。不整形円形の地床炉で、長径144cm、短径108cm、深さ10cmを測る。主軸はN-38°-Eを指し、住居跡本体の主軸と若干のずれを生じている。

壁の立ち上がりは鈍角で摺鉢状の掘り方を持つ。主軸上やや手前に小ピットを伴う。断面観察の結果からこのピットは炉の構築ないし造り替え時の造作に伴うものと考えられる。

第6表 第17号住居跡柱穴計測表

名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
Pit 1	52.0	48.0	48.5	Pit 6	44.0	34.0	42.0
Pit 2	30.0	30.0	16.8	Pit 7	50.0	44.0	59.6
Pit 3	56.0	54.0	50.2	Pit 8	38.0	34.0	17.2
Pit 4	38.0	32.0	22.9	Pit 9	22.0	20.0	18.8
Pit 5	56.0	40.0	54.2	Pit 10	26.0	22.0	45.9

覆土中から多量の遺物を出土した。加曾利E I式から同E III式にわたる土器が出土している。

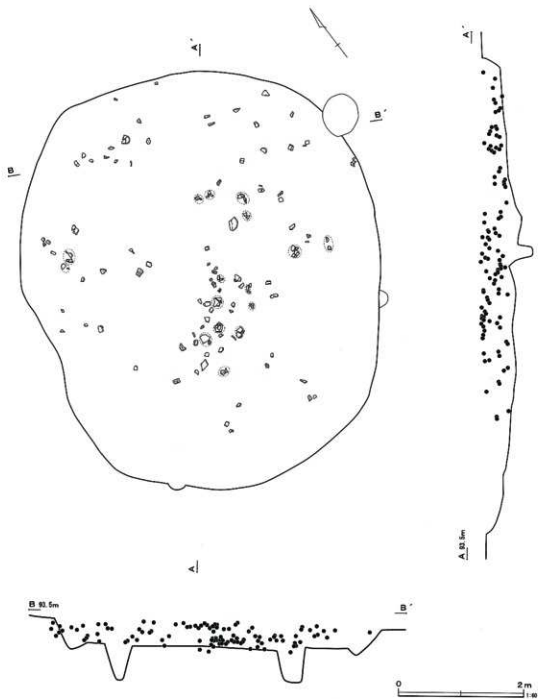
出土層位の面では、検出面直下と炉跡直上の2面に分化する傾向を見て取れる。第30図4や第32図53といった中期末葉の土器は検出面付近に集中しており、炉上面の遺物は第30図1・3といった加曾利E

II式期のものが主体となっている。

第17号住居跡出土遺物

土器 (第30~32図)

1・2は加曾利E II式で、小型のキャリパー系深鉢である。1は胴部中段のみ残存する。頸部無文帯との境は半截竹管状工具を用いた横位の平行沈線に



第27図 第17号住居跡遺物出土状況 (1)

よって区画される。胴部には同一工具による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はRL単節の縄文で、縦位回転で粗雑に施文される。最大径14.2cm・現存高10.7cmを測る。胎土はシルト質で、亜角礫の混入が目立つ。

2は底部から胴下半部にかけて残存する。半截竹管状工具の平行沈線による蛇行懸垂文が垂下し、地文はみられない。全面に篋状工具による粗い縦位の撫で調整が観察される。最大径10.3cm・現存高8.7cmを測る。胎土はきわめて砂質である。

3は曾利Ⅱ式の小型深鉢で口縁から胴上半まで残存する。口縁は無文で直線的に開き、口唇は肥厚しつつ内屈して、内面に稜を形成する。頸部には括れを持ち、円形刺突を伴う2条の隆帯が巡る。肩部には籠目文が配され、胴部との境を1条の隆帯で区画する。胴部の地文は半截竹管状工具による集合沈線文である。最大径20.8cm・現存高9.0cmを測る。

4は中期末葉の加曾利EⅢ式である。キャリパー形の深鉢で、口縁から胴上半部にかけて残存する。胴上半部に縦長の楕円形区画が並び、内部にRL単節縦位回転の縄文が施文される。区画を取り巻くようにして同心円や逆U字のモチーフが描かれ、余白を埋めている。吉井城山類の範疇に収まる土器だが、大木9式にも類似する。最大径31.8cm・現存高16.2cmを測る。

6は半粗製の深鉢である。器形は緩いキャリパー形を呈し、口縁から胴中段までが残存している。口縁は軽微に内湾する。胴上半部には篋状工具による横位の撫で調整がみられ、胴部にはRL単節の縄文が縦位回転で施文される。器面の風化が甚だしく、部分的に剥落がみられる。最大径22.0cm・現存高10.1cmを測る。胎土はシルト質である。

5は中期後葉～末葉に属する浅鉢で、口縁から胴中段にかけて残存する。口縁部に無文帯を持ち胴部との境を幅広い沈線で区画する。胴部には櫛歯状工具による縦位の集合沈線文が施文される。最大径33.2cm・現存高14.0cmを測る。

7は小型の無文深鉢である。器形は緩いキャリパー形を呈し、口縁から胴中段までが残存している。口縁から胴上半部にかけては横位の研磨が徹底され、胴中段では篋状工具による粗い縦位の撫で調整が観察される。最大径15.2cm・現存高7.5cmを測る。胎土に片岩やチャートの小礫の混入がみられる。

8は器台である。無文で、内外面に篋状工具による粗い撫で調整が観察される。上面平坦で、側面に透かし穴などの造作はみられない。裾は軽微に肥厚して外側へのめくれがみられる。最大径19.6cm・現存高4.9cmを測る。胎土に多量の砂・シルトを混入し、焼成はやや不良である。

9～23はキャリパー形深鉢口縁部で、9～11および23が加曾利EⅠ式、他はEⅡ式であろう。9・10は山形波状口縁上面に渦巻文を持つ。12・15～18は繋ぎ弧文である。19はややエラの張る区画文で、浅鉢の可能性もある。22は縦位の集合沈線文を地文とする。

24～33は胴部破片である。25～30は平行沈線による懸垂文が垂下する。29は大木8b式の流れをくむ剣先モチーフがみられる。

31・32は隆帯による懸垂文が垂下する。33は縦位の燃糸文を地文とする。

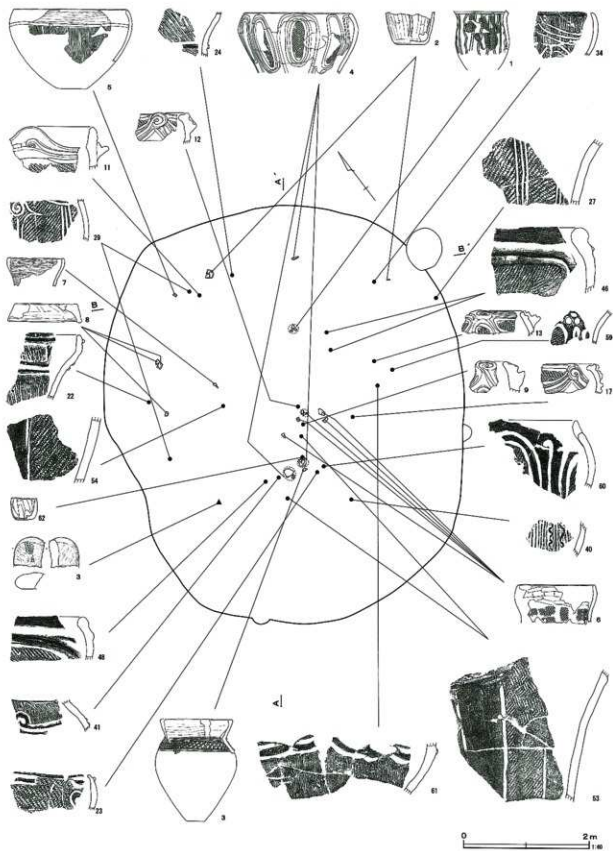
34は連弧文土器である。口縁直下に3本沈線の連弧文が巡るほか、胴上半部にも波状文が巡る。35は半粗製の土器で、口縁から胴上半部にかけて無文帯となり、胴中段から櫛歯状工具による集合沈線文が垂下する。

36～40は曾利Ⅱ式系の土器である。半截竹管による集合沈線文を地文として、蛇行する浮線文が垂下する。36のみ縄文を地文とする。

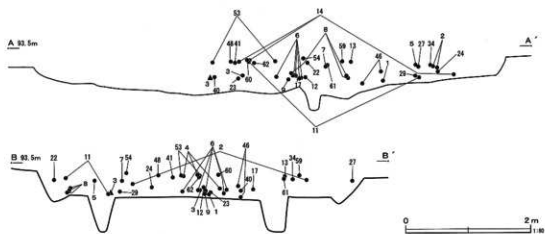
41は浅鉢の胴上半部で、同時期の深鉢口縁部文様帯に由来する渦巻文が展開する。胴中段がソロバン玉状に張り出し、頸部が括れて口縁外反するものと思われる。

42以下は磨消文様のみられる破片で、大半が後期初頭に属するものとみられる。

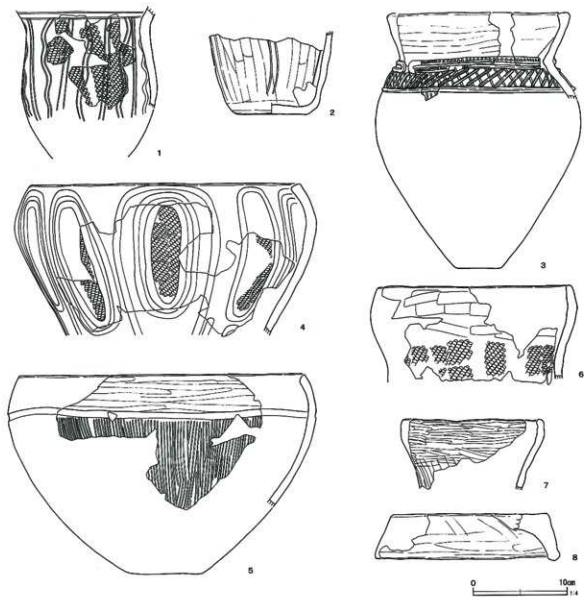
42～68は沈線による磨消文様が描かれる深鉢であ



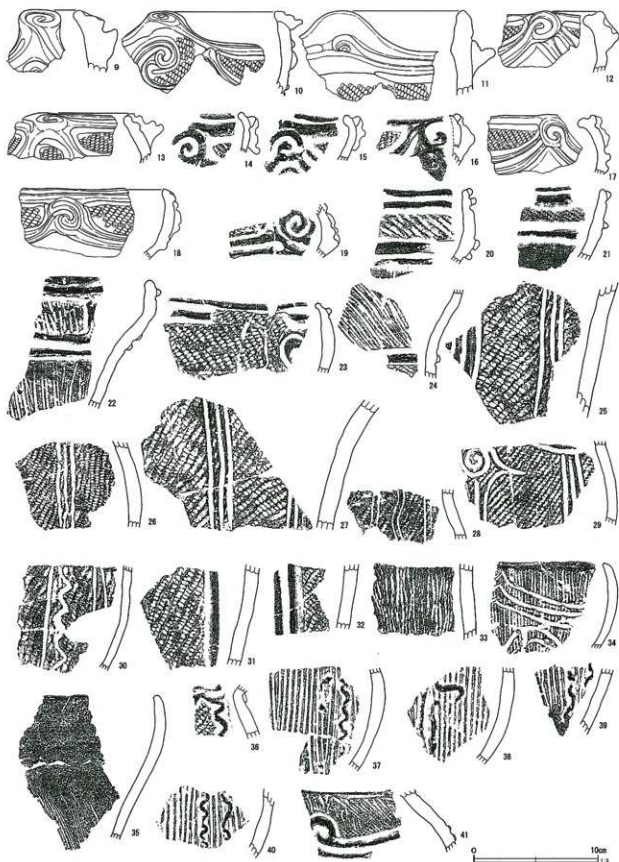
第28图 第17号住居跡遺物出土状況 (2)



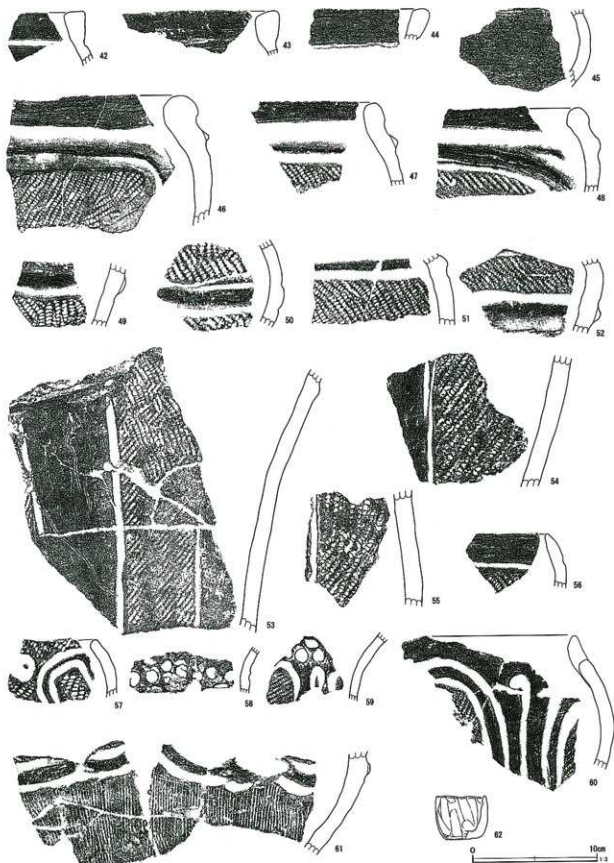
第29图 第17号住居跡遺物出土状況 (3)



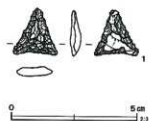
第30图 第17号住居跡出土遺物 (1)



第31图 第17号住居跡出土遺物(2)



第32图 第17号住居跡出土遺物 (3)



第33図 第17号住居跡出土遺物 (4)

第7表 第17号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	石鏃	チャート	1.8	1.8	0.4	1.0	
2	打製石斧	砂岩	6.9	3.9	2.2	75.1	
3	凹石	安山岩	6.0	6.0	3.5	167.7	

る。42～49は口縁部である。すべて波状口縁で、42は漏斗状の大型突起、43は橋梁状の突起を持つ。50～57・63はJ字モチーフが描かれる胴上半部である。54は胴下半部から鋸歯状のモチーフ先端が貫入する。69～71は胴張りの大型深鉢の口縁部で、水平口縁直下に無文帯を持ち、胴部の縄文施文部との間を微隆起線で区画する。71は胴部に幅広い磨消態垂文が垂下し、両側が微隆起線で区画される。72は2本隆帯で大柄の渦巻文を描く髷山類である。

石器 (第33図)

1は平基の石鏃である。腹面に主要剥離面を残し、3辺に交互剥離がみられる。石材はチャートを使用する。

2は打製石斧で、刃部と基部をそれぞれ欠損する。腹面に主要剥離面を残し、側縁の限られた部分に潰しが観察される。砂岩を使用する。

3は磨石転用の凹石で、磨石としては両面、凹石としては片面のみ使用する。多孔質の安山岩を使用する。

第18号住居跡 (第34～36図)

C-4、D-3・4グリッドに所在する。北西壁を第13号住居跡・第113号土坑に、南東壁を第12号住居跡に切られるほか、第115号土坑に切られる。楕円形の竪穴住居跡で、長径6.60m、短径5.16m、深さ0.21mを測る。主軸はN-42°-Eを指す。

床面は起伏に富んでおり、中央がやや下がっている。壁の立ち上がりは比較的鈍角で、壁溝はみられない。床面上から6本の柱穴を検出した。四隅に位置するP1・P3・P5・P6が主柱穴に相当するものと思われる。

床面中央部に炉跡を検出した。不整楕円形の埋篋炉で、掘り方は長径0.78m、短径0.47m、深さ0.41mを測る。長軸方向はN-12°-Wを指す。これは竪穴本体の主軸と著しくずれており、建替えによる設計変更の可能性も考えられる。

土器は炉の主軸南端の壁寄りに偏って検出された。上下を欠いた深鉢胴部で、正位に埋置されている。

第8表 第18号住居跡柱穴計測表

名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
Pit 1	46.0	44.0	52.4	Pit 5	54.0	48.0	62.8
Pit 2	36.0	26.0	13.5	Pit 6	40.0	36.0	45.8
Pit 3	40.0	40.0	10.7	Pit 7	28.0	22.0	14.3
Pit 4	44.0	30.0	19.4				